

空



2005年

SORA 11号

晴夜 (11) | 2

柴田 佐知子

博多祇園山笠三句

山笠の男なんだか威張りだす

山笠やまがさを組む男囲みて男ばかり

山笠の長老に町したがひぬ

宗像七句

銚のごと真直ぐ海女の潜りゆく

海人族の盆道蒼き沖へ伸ぶ

満ち汐に押され西日の漁師町

海の正倉院・沖の島

島すべて媛神のもの草の実も

秋潮に禊して入る神の島

レクイエム

荒井千佐代

耶蘇村に入るや緋カンナ血のカンナ
炎天下聖句ひとつを持ち歩く
磯墓の方に抜けたる茅の輪かな
大瑠璃の午後を夫と老いゆけり
いかづちも神の意黙示録を閉づ
レクイエム弾く夏手袋を脱ぎて

早星聖水盤は海の石

舟着くや棘のするどき茱萸の木に

泣き虫きかん気園庭の夏蓬

学長のひまはり撫でて去りにけり

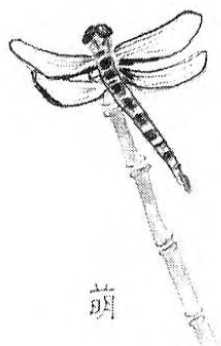
浜荘の海中生簀つゆの星

聖書読む夏さぶの灯を低うして

髪洗ふ眼閉づれば怒濤音

十字架を標にすすむ油照り

夏深むマリアの抱くみどりごに



萌

梅雨平ば

服部 早苗

藤咲いてうすむらさきの天赦日

繭を煮るゆつくり円を描きながら

木洩れ日の古道に落ちてえごの花

青嵐円空仏の目のひとすぢ

紅の花ゆれてかわいてしまひけり

あづまやを十字によぎる夏の蝶

とうすみともつかのまのひかりとも

梅雨茸生えて生やしておきにけり

楮の実耳たぶよりもやはらかし

わがあとについでくるらし道をしへ

梅雨半ば珈琲豆を挽く匂ひ

やまももの鬱勃たる実砂糖漬

雷去つてゆらしてみたる壇の澱

噴水に声奪はれてしまひけり

端居しておぼろおぼろと童歌



山

笠

青山
悠

潮汲んでざぶざぶ洗ふ山笠の棒

山笠^{やま}を組む地に白妙の幣を立て

団扇得て天狗に力山笠飾る

飾り山笠金扇かざす壇の浦

リパレン飾り山笠・分福茶釜

罷り出し茶釜が踊る飾り山笠

昇き山笠の近づいてくる地鳴りかな

笛方の白衣涼しき鎮め能

蟬時雨まつり終へたる総鎮守

朱の鳥居重ねてくらし鴉の子

十方に人のくらしや雲の峰

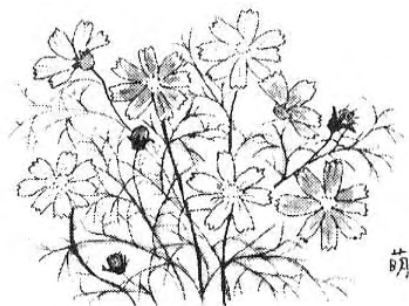
夕立の追ひかけてくる交叉点

白南風や路地に鯛抱く漁の神

並倉の影乱したる濁り鮎

朝霧や船笛近き平家塚

追はれたる僧の彼方や蓮は実に



花
氷

秋 千 晴

ぼろぎれのごとく引きずる若布刈

薔薇活けてつま先までも染まりたる

校門の変はる桜の切られたり

春眠を真二つに裂く大余震

地震走る亀裂に梅雨の浸入す

子と恋の話などして豌豆剥く

だんだんと背に馴染みゆく茶摘籠

諦めの悪き男がいちご食ふ

客去りて風鈴の音の高まれり

溶けるほど子が見入るなり花氷

色褪せし浮人形のなほも浮く

黒潮をひきつれて烏賊波打てり

夏木立牛飼の来て牛四角

蓮根の穴の数だけ道のあり

蟪蛄のついと大きな目玉あり

